芭蕉元禄事業　奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年十月度 入選句（投稿総数二千八百九十六句・一般投句数五百八十二句）

選者　名和　永山

特選

賜りし新米早速塩むすび　大垣市　佐竹　余史美

「いただいた新米を、早速おむすびにした」という、単純な景である。しかし、この句の良さは「賜る」という謙譲語に大きな意味を持たせている。きっと、友人かどなたかにいただいたのであろうが、「賜る」この一言で自然からの恵みや米作り農家の心までいただいたと解釈できる。そのことによって、新米のおいしさが浮き出てくる。炊きたてをそのままおむすびにする。新米のおいしさが伝わってくる句である。

蛇足だが、中七「新米早速」の「早速」は（さそく）と読むことによって、「句のリズム」が生まれてくる。

葛咲くや我が故郷に字残る　兵庫県神戸市　紫　桔梗

「葛咲くや」「我が故郷に字残る」の取り合わせの句である。葛は、野山に多く、蔓の長さは十メートル以上にもなる。また花は、紫紅色の蝶形で総状に咲く。一般的には秋の七草として知られている。

「我が故郷に字残る」平成の市町村合併で「字」が残っているところは少なくなっているというが、故郷にまだ「字」があるという何となく懐かしい響きである。葛もまた、昔から何も変わることなく咲き続けているという、そんな情景が浮かんできた。

柿の実の色増してゆく夜の風　岐阜市　伊藤　瑞実

柿の色がだんだん橙色を濃くしていく。この表現を「色増してゆく」という措辞に、少しずつ色が濃くなっていくことや甘さまでもが「増してゆく」という広がりが生まれている。「色を濃くして」だと、色だけに限定されてしまうことはお解りだろう。そして下五に「夜の風」という因果関係がきちんと置かれている。中七のうまい使い方である。

秀逸

病床の母に先ず炊く今年米　不破郡垂井町　富田　実郎

最終の電車の音や秋深し　安八郡神戸町　高橋　日出美

秋茄子の紫紺つやあり美味の相　大垣市　神野　武彦

自刃せしもののふの墓所こぼれ萩　養老郡養老町　田中　紫香

川風の少し尖りて秋鵜飼　岐阜市　小湊　順子

嫋々と差す手引く手の風の盆　不破郡垂井町　中嶋　笑子

帰り道月に心を見透かされ　大垣市　松岡　みつ

尾頭の皿にはみでて焼秋刀魚　揖斐郡池田町　木塚　しょう

駅の名は昔のままや小鳥来る　大垣市　村田　通夫

薬屋を左に折れりゃ秋深し　三重県鈴鹿市　松井　政典

入選

秋の灯の消へず病窓更けにけり　岐阜市　冨永　萬里

旧家倉茶房となりぬ返り花　大垣市　棚橋　みさを

秋扇残り香そっとたたみけり　大垣市　秋山　くに子

二十三夜月娘の足音が近づきぬ　瑞穂市　伊藤　恵水

小鳥来る画布を広げし水の郷　大垣市　野村　多佳子

桐一葉はや山里に日暮くる　大垣市　坪井　克枝

川底の石まで透かす月明り　不破郡垂井町　児玉　信子

西美濃の土となりけり彼岸花　大垣市　中西　映衣子

無花果の爆ぜて大きな笑ひ口　大垣市　早崎　美弥子

カーテンをひらりと開ける秋の風　安八郡神戸町　大槻　恭子

入選

伊那谷の満月眺む影の濃し　大垣市　松永　勝二

武士の虫すだくなり関ヶ原　大垣市　日々是　頓

見よがしにブランド纏ふ案山子かな　養老郡養老町　田中　秀草

急ぐ子に三日月やさし塾帰り　大垣市　安田　むつこ

きぬかつぎ意地悪な子もたまにいて　大垣市　吉田　てるみ

見舞い終え長き廊下や秋扇　大垣市　平野　きぬよ

プロポーズされコスモスの花は揺れ　大垣市　宮上　美濃留

秋航の白き水尾敷く海真青　千葉県千葉市　箕輪　恵三

しなやかに光透かして青芒　揖斐郡揖斐川町　粟野　みねお

里ことば話題は尽きぬ古案山子　大垣市　片山　洋子

選者吟

鳶の輪の中の輪中や稲熟るる　永山